

幼稚園教諭の専門職意識を形成する要素の可視化

－実習関連科目の改善に向けた取り組み－

フィールデン(野呂)育未,^{*†} 岡田 雅樹^{*}

目的：教育者は専門職であると認知されてきたが、教育専門職としての幼稚園教諭の専門性は社会から適切な評価を得られていない。看護学領域においては、看護の質向上のためには、専門職としての個人の意識の重要性が指摘されてきた。本研究においては、インタビュー調査を通し、「専門職としての意識」を形成する要素とその関連を可視化し、学生が必要な能力や資質を身につけ、専門職意識を高めるための教育内容・方法を再構築することを目的とする。

方法：阪神地区の私立幼稚園に勤める幼稚園教諭12名（4つの幼稚園から経験年数の異なる（初任・中堅・ベテラン）3名の人選を園長に依頼した）。園長に研究の趣旨を説明し、各園にてそれぞれ1時間程度の半構造化インタビューを実施した。

結果：専門職としての意識を構成する要素の可視化、また要素としての「コミットメント」と「自己成長・自己実現」には何らかの関連性があり、それらの高まりには「同僚性・集合性」も影響を与えている様子が明らかとなった。改めて、保育の現場のみならず、養成校を含めた専門職として学び、育つ環境の重要性が明確となった。

結論：今後も継続して調査を続け、データの丁寧な分析を通し、専門職意識を高めるための授業内容を改善・再構築することを追究していきたい。

キーワード：幼稚園教諭, 専門職意識, インタビュー調査, 質的分析, 授業改善

(2022年10月14日受付け、2022年12月7日受理)

はじめに

幼児教育における「保育の質」は、教育者の質に尽きる。1966年のILO・UNESCOの「教員の地位に関する勧告」以来、教育者は専門職であると認知されてきたが、教育専門職としての幼稚園教諭の専門性は、社会から適切な評価を得られていない。

小川¹⁾は、保育の専門性については、保育に携わる人間の自己主張だけで済まされるものではなく、少なくとも他の専門家集団や一般社会の人々から専門性に対する承認が必要であると述べている。このように、職業における専門性の在り様は、その職業に対する社会的評価との接続を無視することができない。さらに天野²⁾は、幼稚園教諭の社会的評価の低さの要因として、「保育者の自覚のなさ」を指摘しており、これも保育者の専門職意識の低さと社会的評価の関わりを示す

ものといえる。

また、保育とは別の専門職に目を向けてみると、前信ら³⁾は、看護学領域において看護の質向上のためには、個人の専門職として自分が何をすべきか、どうあるべきかといった専門職としての意識が常に重要だと指摘している。また、勝原⁴⁾は、日本の看護師のプロフェッションフードとして、「社会的意義」、「最高で最上のコミットメント」、「同僚性・集合性」、「自己実現・自己成長」、「倫理・道徳規範の遵守」の5つの要素を明らかにしている⁵⁾。このように看護職においては、専門職としての意識を形成する要素やその関連について検討が進み、看護職の専門性を向上させ、社会的評価を変化させてきた経緯をもつ。看護職の先行研究を踏まえると、専門職としての意識の在り様の解明は、仕事の質の向上や、職業に対する社会的評価の向上のために重要な意味を持つと言える。したがって、それ

*大阪人間科学大学 人間科学部 子ども教育学科

*†責任著者：大阪府摂津市正雀1-4-1、大阪人間科学大学 人間科学部 子ども教育学科
E-mail : i-noro@kun.ohs.ac.jp

らの知見を保育職に応用することで、保育職の専門性の課題の解明を目指したい。

図1に示すように、専門性は、「①専門的な知識・技術、資質能力」と「②専門職としての意識」の2つから成り立つ。「①専門的な知識・技術、資質能力」は保育の質に直結するスキルであり、「②専門職としての意識」は、保育の質を支える責任や誇りとして作用する。ここで言う①とは、保育者の専門性議論において、鯨岡⁶⁾や藤井⁷⁾等が述べる「理論的・理念的専門性」や「実践的専門性」といった基本的な専門知識や技術を意味する。②は、森上⁸⁾や西坂⁹⁾等が指摘する「人間性」や「アイデンティティ」につながるものである。秋田¹⁰⁾も述べるように、「保育者の専門性」は人間性と専門知識・技術の両者が複合的に絡まり合い形成されると考える。したがって、この2つからなる保育者の専門性が土台となることで、「保育の質」は保たれる。「①専門的な知識・技術、資質能力」が高度に高まることで「②専門職としての意識」も高まり、「②専門職としての意識」が高まることで「①専門的な知識・技術、資質能力」を高めるという関係もある。天野の指摘のように、②が高まることで社会的評価も高くなり、良質な人材確保などを通して教育者の質が高くなり、結果として「保育の質」を向上させることにつながる。すなわち、「②専門職としての意識」の位置づけが重要になる。

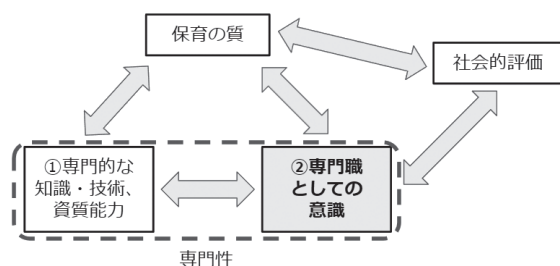


図1 保育の質・社会的評価・専門性の関連

そこで、本研究では「②専門職としての意識」を推し量るための指標として「組織・職業コミットメント」に着目する。組織・職業コミットメントは、勤務する組織や職業・専門に対して持つ態度や帰属意識を意味する概念であり、離退職行動や日常の職業行動と関連をもつ要因として検討されてきた(Mayer, Allen, & Smith, 1993¹¹⁾等)。わが国の看護学領域においては、看護学生や現職看護師を対象としたコミットメント研究が学生の教育的支援や職業人としての熟達のための支援の検討等に役立てられている。

この組織・職業コミットメントの概念を用いて、私立幼稚園教諭386名の「専門職としての意識」を捉えるため、質問紙による事前調査を実施した¹²⁾。その結果、幼稚園教諭は組織および職業ともに、総じて高く評価

する傾向にあった。特に、情緒的にコミットする傾向が高く、勤務園(組織)や幼稚園教諭職(職業)のいずれにも、誇りや愛着を持って仕事をする様子が明らかとなった。この結果自体は、職業に従事する者にとって良いことであり、専門性に関する問題を直接的に見出すことにはならない。しかしこの結果は、既に「社会的評価」を確かなものとする看護師の「専門職としての意識」と異なる点を見逃すことはできない。専門職として同様であるはずの両者の「専門職としての意識」の違いを生み出している要素はいったい何なのか。特質や専門性といった人間の意識に関わるものを量的分析で課題を見出すことには限界があった。

そこで本研究では、インタビュー調査によってさらに詳細なデータを取得し、それを質的に分析することで幼稚園教諭の「専門職としての意識」を形成する要素とその関連を可視化し、学生が必要な能力や資質を身につけ、専門職意識を高めるための教育内容・方法を再構築することを目的とする。

方法

1. 調査対象

阪神地区の私立幼稚園に勤める幼稚園教諭12名(4つの幼稚園から経験年数の異なる(初任・中堅・ベテラン)3名の人選を園長に依頼した)。

2. 調査時期

2021年9月～11月

3. 調査手順

園長に研究の趣旨を説明し、各園にてそれぞれ1時間程度の半構造化インタビューを実施した。

4. 調査内容

勝原のプロフェッションフード⁴⁾、およびフィールデン¹²⁾で用いた質問項目を参考にインタビュー項目を作成した。

5. 倫理的配慮

大阪人間科学大学の「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会規定に基づき、インタビュー調査を始める前に、本研究の目的、手順等を書面および口頭にて園長と協力者に説明した。また、研究への参加は協力者の自由意思であり、拒否における不利益はないこと、途中で辞退することも可能であることを伝えるとともに、研究の公表にあたっては、個人情報保護に十分留意することを伝えた。その結果、研究への協力および内容の公開について同意を得た。

結果と考察

1. 組織コミットメント

収集した音声データをNVivo上でコード化¹³⁾、「組織コミットメント」のカバー率を可視化した(図2)。

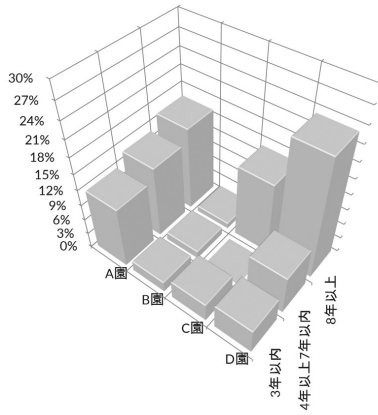


図2 組織コミットメントのカバー率

X軸は所属園、Y軸は保育経験年数を示した。A園では、保育経験年数を重ねるごとにだだらかに組織コミットメントが高くなっており、D園においても上昇の割合に差はあるが、同様の傾向が見られる。しかし、B園とC園においては、異なる様子が認められたことから、所属する園によって、組織コミットメントの出現の仕方に差があり、これまでの量的分析の結果と相違がみられた。

このことは、組織コミットメントが保育経験年数に影響を与えているのか、あるいは、保育経験年数の長さが組織コミットメントを高くするのか、単純な関係にあるのではなく、所属園の職場の環境等を含めたさらに詳細な分析が必要であることを示している。

2. 組織コミットメント

次に、「組織・職業コミットメント」について、図3に示した。

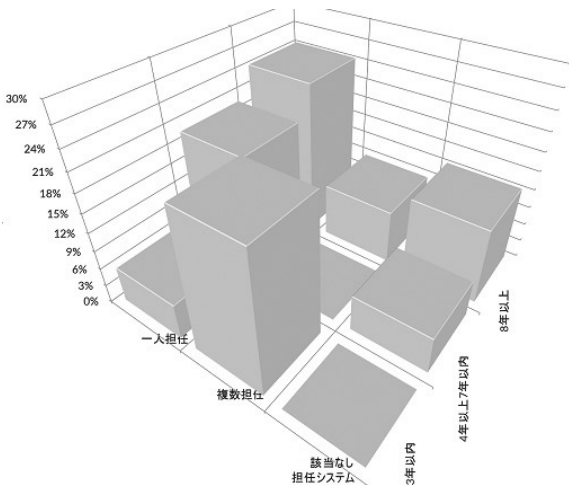


図3 組織・職業コミットメントのカバー率

一人で担任をもつのか、複数で担任をもつのかといった担任の形態および保育経験年数の長さも組織・職業コミットメントとの関連が認められた。経験年数3年以内では、複数担任制における組織・職業コミットメ

ントが最も高かった。一方、一人担任制では、保育経験年数が長くなるにつれ、組織・職業コミットメントが高くなっていく様子がみられた。つまり、初任期のように一人ではまだ自信をもつことが難しい時期に、先輩と組むような複数での担任制を経験するシステムは、組織・職業ともにコミットメントを高める要因になり得ると言える。一方、幼稚園教諭の仕事としての醍醐味の一つであろう一人担任制は、経験年数と比例するように、組織・職業コミットメントを高める要因になるであろうことが推察された。

初任期の成長やキャリアを支えるため、複数担任制は有効なシステムであり、また初任期を終えた頃には、一人でクラスに責任をもつことが個々の教師の成長につながるであろうことを示唆する結果と言える。

3. 自己成長・自己実現

続いて、「自己成長・自己実現」について、図4に示した。

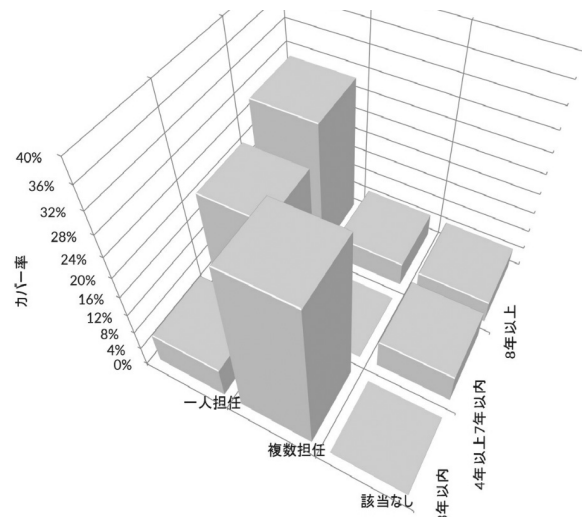


図4 自己成長・自己実現のカバー率

この自己成長・自己実現についても同様に、担任の形態及び保育経験年数の長さとの関連が認められることから、この点においても保育者の成長やキャリアを支えるための担任の形態の重要性を読み取ることがができる。このように図3と図4は、ほぼ同様の形を示すことから、組織・職業コミットメントと自己成長・自己実現の間には何らかのつながりがあると考えられる。

4. 専門職として学びを深める職場環境のあり方

またこの点は、以下の図5に示す頻出語にも表れている。

4園ともに共通して、子ども、自分、先生、幼稚園…というように、保育の実践の場で働く先生が子どもを媒介とし、新人からベテランを含む先生集団の中で日々実践を重ねている様子を読み取ることができる。

この様子をイメージしやすいよう、図6に詳細を示した。

保育実習指導ⅠA

第9回 こころもちを育むためのワークシート

授業日 令和4年7月8日

①今日のテーマ：
子ども関係性で育まれる感情の自己調整力

②内容を読んで自分で考えたキーワード(3つ)：
感情の自己調整、子ども同士の分かち合い、子どもたちの関係性

③今日の内容について、以下の3つの視点に沿って丁寧に記述してください。
箇条書きでもOKです。

K (What I know) 知っていること	W (What I want to know) 知りたいこと	L (What I learned) 学んだこと
感情自己調整する力が身につくことで、相手の気持ちを考えたり思いやることができるようになること。 子ども一人ひとり、感情を自己調整する力が身につくタイミングに個人差があるが、他者との関わりの中で自然と身につくこと。	保育者として、感情の自己調整が難しい子どもが感情的になって物や人に当たらないように、どのような言葉かけや関わりを持ったら良いか。 子ども同士が意見のぶつかり合いによって喧嘩をした時に、どのように互いの意見を整理したら良いか。	園生活の中で徐々に友達の特徴や行動の予測ができるようになっていき、友達との衝突が起こらないように子どもたち自身が上手に距離をとって関わり方を築き合っていること。 子どもたちの関係性が、子どもたちに資質を身につけていること。

④保育者として今日の内容についてどう考えますか？
上記③で整理した内容を踏まえて、400字程度で自分の考えをまとめてください。

子どもの育ちや学びを促すためには、環境作りや保育者の対応が必要であるが、子ども同士で互いに成長し合う場面もある。子どもは成長する過程において、置かれている環境や人との関わりを経て適応力を身につけていく。その最初の環境が幼稚園や保育園であることから、それらが担う役割は子どもの人間性を育てる上で最も重要であると考えられる。
感情を自己調整する力が身につくに至るまでに、子どもたちが遊びや園での生活を過ごして、友達の言動を認識し、互いの意見の食い違いや思いの違いなどから自分の気持ちを整理することの繰り返しがある。保護者や保育者の教え以上に、子ども同士の会話の中で成長し合うことに意味があると考えられる。
子ども自身が自分の感情をコントロールして人と良い関係性を築き上げていくことができれば、保育者は環境を整えつつ子ども同士が人と人の関係性や言葉、行動を考える場面を大切に、そのような場面が見受けられる活動を取り入れることが必要であると考えられる。

図8 こころもちを育むための専用ワークシート

このワークシートはシンキングツールを用いて、学生が自身の考えを言語化し、整理しやすい仕組みとなっている。授業担当教員は、Google Classroomに提出された全学生分の課題を読み、発表者を2名選出し、授業当日に指名する。選出された学生は、提出したワークシートの内容を発表し(図9)、また聴講している学生はPC等を使用し、新たな視点や気づき等をメモし、他者の考えを取り込む作業を行う(図10)。

このように専門職者としての保育者について、様々な視点から思考し、アウトプットする機会を毎授業で確保することで、学生の専門職意識の刺激および向上を図った。

(3)自校教育をテーマとしたジグソー法の活用

組織コミットメントと職業コミットメントは関連性があることから、学生が保育職という職業に対するコミットメントを高めるのみならず、同時に所属する組織である大阪人間科学大学に対するコミットメントを高めることも重要であると考えた。つまり、本大学で学ぶからこそその力や強みを育てるため、薫英学園の歴史、理念、学是等を学び、学園への理解を深めるための機会を設定した。その際、個人で調べ、考えるだけでなく、ジグソー法という協同学習を促す方法を取り入れ、薫英学園への組織コミットメントを高め、ひいては職業コミットメントの高まりにつながることをねらいとした(図11)。

(4)学生の専門職意識の変容と学び

上記のような新たな取り組みを踏まえ、2022年度前期において既に学生の専門職意識にも変化と学びがみられた。

第2回の授業において、「プロの保育者であれば、事例のような子どもにどのようにかわるか？」を問うワークシートを実施した。回答には、「子どもたちと同じ目線で楽しそうに遊ぶ」や「お行儀が悪かったら、注意する」等、「先生」という職業に対する漠然としたイメージが記されており、保育を学んでいない人でも考え得るような内容であった。その3か月後である第



図9 発表の実際の様子



図10 発表を聴いている実際の様子



図11 ジグソー法を用いた活動の実際の様子

13回の授業において、同様のワークシートを実施した結果、例えば「3歳、4歳、5歳」といったように年齢に分けて発達を捉える内容、「子どもの主体性を尊重する」といった保育者の役割にかかわる内容、「保育者としてのかかわり方」といった保育者としての自覚や責任にかかわる内容等の記載がおおよその学生において増加していた。このことから、3か月というわずかな期間ではあるが、学生が保育職という専門職について学び、考え、行動することが、学生の意識の変容や学びそのものに影響を与えることが示唆された。

また、毎年授業の最終回に実施している『ループリックによる自己評価を踏まえたレポート』を昨年度の学生のもものと比較したところ、明らかに「自覚」、「責任」、「心意気」、「誇り」等といった専門職としての意識につながるであろう単語が多数表れていた。対象者の異なりや比較データの数等、今後の課題として慎重に考慮すべき点はあるが、上述してきた新たな授業内容は、学生の専門職に対する意識の変容に影響を与えることが示唆された。

結 論

本研究において、専門職としての意識を構成する要素の可視化、また要素としての「コミットメント」と「自己成長・自己実現」には何らかの関連性があり、それらの高まりには「同僚性・集合性」も影響を与えている様子が明らかとなった。改めて、保育の現場のみならず、養成校を含めた専門職として学び、育つ環境の重要性が明確となったと言える。今後も継続して調査を続け、データの丁寧な分析を通し、専門職意識を高めるための授業内容を改善・再構築することを追究していきたい。

謝 辞

本研究は、令和3年度薫英研究費の助成を受けたものである。本研究の趣旨をご理解いただき、インタビュー調査の回答にお時間を割いていただいた4園の幼稚園の先生方と園長に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 小川博久. 保育者養成論. 萌文書林. 2013, 9-25
- 2) 天野正子. 専門職化をめぐる保育園保育者の意識構造. 社会福祉研究. 1975;16:22-27
- 3) 前信由美, 長吉孝子. 看護師の専門職意識の把握: アンケート用紙を作成して. 看護学統合研究. 2003;5(1):9-16

- 4) 勝原由美子. 日本の看護婦・士の Professionhood を構成する要素. 日本看護科学会誌. 1999;19(1): 42-48
- 5) 滝下幸栄, 岩脇陽子, 松岡知子. 専門職としての看護の現状と課題. 京都府立医科大学雑誌. 2011; 20(6):437-444
- 6) 鯨岡峻. 保育者の専門性とはなにか. 発達83. ミネルヴァ書房. 2000, 53-60
- 7) 永井聖二, 神長美津子(編), 藤井志保(著). 幼稚園教諭の専門性とその成長. 幼児教育の世界. 学文社. 2011, 136-149
- 8) 森上史郎. 保育者の専門性・保育者の成長を問う. 発達83. ミネルヴァ書房. 2000, 68-74
- 9) 西坂小百合. 新任保育者が直面する困難とこれからの保育者養成. 保育学研究. 2014; 52(3): 151-153
- 10) 秋田喜代美, 箕輪潤子, 高櫻綾子. 保育の質研究の展望と課題. 東京大学大学院教育学研究科紀要. 2007;47:289-305
- 11) Mayer, J.P., Allen, N. J., & Smith, C. A. Commitment to organizations and occupations : Extension and test of a three component conceptualization. Journal of Applied Psychology. 1993;78:538-551
- 12) フィールデン(野呂)育未. 組織・職業コミットメントにみる幼稚園教諭の職業に対する意識—私立幼稚園教諭を対象とした質問紙調査を通して—. 日本子ども社会学会第27回大会発表要旨. 2021; 87-88
- 13) 古川亮子. 看護研究のための NVivo 入門. 新曜社. 2019

Visualization of Elements that Form the Consciousness of Professionalism of Kindergarten Teachers

— Efforts to Improve Training-related Subjects —

Ikumi FIELDEN-NORO, MA,^{*†} Masaki OKADA, MA^{*}

Objectives : Although educators have been recognized as professionals, the expertise of kindergarten teachers as educational professionals has not been properly evaluated by society. In the field of nursing, the importance of individual awareness as a professional has been pointed out in order to improve the quality of nursing.

Methods : In this research, our purpose was to visualize through an interview survey the elements that form "awareness as a professional" and their relationships, the educational content, and methods for students in order to acquire the necessary abilities and qualities to raise their professional awareness.

Results : We visualized the elements that make up the consciousness of a professional occupation and the relationship between "commitment" and "self-growth/self-actualization" as elements, and their heightened "co-workers/collectiveness".

Conclusions : Once again, it can be said that the importance of an environment for learning and growing as a professional, including training schools, is clear, not only in the field of childcare. I would like to continue the survey in the future, and through careful analysis of the data, to pursue the improvement and reconstruction of class content to raise the consciousness of professionalism in this field.

Key Words : Kindergarten teachers, Consciousness of professionalism, Interview survey,
Qualitative analysis, Class content improvement

(Received in Oct 14, 2022, Accepted in Dec 7, 2022)

^{*} Department of Child Education, Faculty of Human Sciences, Osaka University of Human Sciences.

^{*†} Corresponding author : Department of Child Education, Faculty of Human Sciences, Osaka University of Human Sciences. 1-4-1, Shojaku, Settsu, Osaka 566-8501, Japan.
E-mail : i-noro@kun.ohs.ac.jp